

もらい泣き

simro

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

P4の短編です。11月頃の話でネタバレ有り注意です。BLはほんのり程度です。アニメ化より前に書いた過去作なので主人公の名前は公式のもの（鳴上悠）ではありません。

目次

もらい泣き

「——エブリデイ・ヤングライフ♪ジュネス♪」

ぼんやりと眺めていたテレビから、お馴染みのCMが流れる。

反射的に、テーブルの向かいの席を見る。

いつもこのCMの歌を楽しそうに歌っていた菜々子は……い
ない。

ソファに視線を移す。

堂島の姿も、ない。

二人は今、病院だ。

静かな部屋に聞きなれた声が響くことは無く、ただ、テレビの音が流れるばかり。

「テレビ」という単語が、二人が入院する原因となった嫌な記憶に触れる。

それをかき消すように、リモコンのオフボタンを押しテレビを黙らせた。

「……………」

静まり返った部屋。

——風呂に入つて、もう寝よう…

余計な事を考えてしまう前にそう決めた。

—— P i P i P i P i P i P i …

ポケットの携帯が鳴った。

開いた携帯の窓に表示されたのは「花村陽介」の名前。

「——よう、相棒。今…暇?忙しい?」

キーを押して耳に当てると、聞きなれた声がそう尋ねてきた。

特に何もしていないので暇だと答えた。

「——そっか、よかった。今から、お前んち行ってもいいか?」

陽介の言葉に、何となく時計を見てみる。

針は22時をさしていた。

人を訪ねるには遅い時間だ。

何か急ぎの用事だろうか。

兎に角、誰もいないし何もしていないので問題はない。
別に構わないと告げると、

「——そっか。…って、実はもう玄関の前にいたりするんだけどな？」

少し笑いながら言う陽介。

携帯を持ったまま、玄関へ行き鍵を開けると、右手に携帯、左手にジュネスのビニール袋を持った陽介が立っていた。

「よう、相棒」

そう言つて笑う陽介。

お互い携帯を切り、陽介を中へ通した。

「お邪魔しまーす。うー夜は更に冷えるよなー」

そう言つてこたつに入り冷えた手を温めている。

コーヒーを淹れて陽介に出してやり、何かあったのか聞いてみた。

「ん？あー、ちよつとな。…あそうだ、これ。来週発売のお菓子なんだけどさ、けっこー旨いの。ほれ、食つてみ？」

ジュネスのビニール袋からスナック菓子を取り出し開けると、俺に勧めてくる。

言われるままに、お菓子を摘んで食べてみる。

…確かに、旨い。

「な？旨いだろう？まだ店に並んでないし、一番乗りだぜ？俺ら♪」

陽介も同じようにお菓子を食べながら笑う。

しばらく、お菓子を食べながら他愛の無い会話をした。



「…おーい、矢上？」

名前を呼ばれ、はっと我に返る。

話を聞いているうちに、ぼんやりとしてしまっていたようだ。

「途中から聞いてなかっただろー？オチ聞き逃すつてどーなの？」

不満そうな陽介に、素直に謝った。

「…はあ」

陽介が、小さくため息をついた。

怒らせてしまっただろうか。

「…お前さ、あんま無理すんなよ?…お前が今辛い事は俺達みんな知ってるし、何も隠さなくていいんだからさ」

怒らせたかと思つた陽介から出た言葉は、逆に俺を氣遣うものだった。

「ほれ、言いたいこととか、言ってみ?俺がぜーんぶ聞いてやつから」

陽介が顔を覗き込んでくる。

どうやら今日尋ねてきたのは、俺を心配しての事のようにだ。

心配をかけ済まないと思ひ、俺は大丈夫だと笑つて伝える。

「……………」

陽介が、もう一つため息をついた。

「……………このやろつ」

「!」

むすつとした陽介が突然、俺の頭をがしがしと乱暴に撫でた。

思いがけない陽介の攻撃(?)を、防ごうと必死になる。

髪を乱す手から逃れようと仰け反つた瞬間、後ろに倒れそうになった。

陽介の腕がのびてきて俺の服を掴み、転倒を免れた。

が、そのまま強く引つ張られて、今度は前のめりになる。

そのまま陽介の胸に突っ込み、抱きとめられた。

慌てて身体を起こそうとするが、陽介の腕がそれを許さない。

「…お前、我慢しすぎ」

陽介が、ぽつりと呟く。

「そんな…、そんな無理した笑顔作らせる為に来たんじゃねえんだよ俺はっ」

少し強い口調…でも怒りではなく思いやりを感じる声音で続ける。

「お前は確かに強いよ、すげえよ。俺達の頼れるリーダーだよ。…でもお前だって、俺達と同じ様に、思ってる事や悩んでる事とか沢山あるはずだ。普段口数少ない方だから忘れそうになるけどさ…。たまにはさ…いいんじゃないやねえの?言いたいこと、全部ぶちまけても。」

初っ端から自分の汚い部分とか曝け出す羽目になって、お前の前で大泣きして、殴り合いまでして、お前に色々見られてもう恥ずかしいことなんか何も無い！って感じの俺になら、少しくらい……本音、聞かせてくれるだろ……？」

陽介の優しい声が、胸に染み込んでいく。

隅に追いやって、考えない様に、見ない様にしていたものが、溢れてきた。

「……花村、俺……」

絞り出した声は、掠れていた。

「俺……菜々子ちゃんを……堂島さんを……巻き込んで……っ」

言葉にした途端、涙がぼろぼろと零れた。

「全部……俺……所為……で……」

嗚咽ばかりがもれ、上手く言葉にならない。

この事件を解決する為に、一生懸命やってきたつもりだった。

上手くやれていると、そう思っていた。

でも、二人がいないこの家に帰る度に、思い知らされた。

傲慢だったと。

思い上がりだったと。

その事実を目の当たりにしてもなお、進まなくてはならない毎日。

急激に擦り減ってゆく心。

知らなかった。

目を背けていた胸の傷は、いつしかこんなに広がっていて、こんな

にも酷く痛む。

涙は、その傷から流れ出す血の様に、止まらない。

「……ずっと……ずっとそうやって、自分責めてたのか……。馬鹿だな……誰も

もお前の所為だなんて、思っていないのに……」

陽介の声が、少し涙声になっている。

背中に回された腕に力が入り、強く抱きしめられた。

「前のお返しだ。しばらく胸、貸しといてやる」

そう言って、子供にする様に、頭をほふほふと撫でられる。

陽介の優しさがくすぐったい。

でも、今はただ、その優しさに甘えて泣き続けた。



「…少し冷たい」

やっと涙が引き陽介の腕から開放され、冷めたコーヒーを淹れ直して来た俺に、陽介がぼそつと言った。

「どうやら涙で服を濡らしてしまったようだ。」

花村が泣いた時俺もそうだった、と言うと、

「はは、お互い様ってことか」

そう言って笑う。

つられて笑顔になる。

無理に作った笑顔ではなく、自然に零れた笑顔だ。

コーヒーを置いてこたつに入る。

ふと、視線を感じて陽介の方を見ると、じーつとこちらを見ている陽介と目が合った。

「…………目が赤いな。泣き腫らした顔のお前って、けっこーレアなんじゃね?」

先程顔を洗ってきたが赤みは簡単には引かなかった。

泣きすぎて目の下が少しヒリヒリする。

まじまじとこちらを見てくる陽介に少し気恥ずかしくなって、花村の目だって赤いと指摘してごまかす。

「ん、あー、なんか…見てたらもらい泣き…しちやつてさ…」

照れ笑いを浮かべる。

もらい泣きするのは優しい証拠だ、と言うと、

「お、やっぱ分かる? 分かっちゃう? さっすが俺の相棒♪…でも、そんな素直に言われちゃうと、ちよつと照れるっつーか…。あそーだ、今度そういうこと言うときは、クマのモノマネでもしながら言うってのはどうよ。ヨースケは優しさでできてるクマね、とかなんとか」

陽介は本気で照れているらしく、少し赤い頬で茶化している。

クマの声色まで真似る陽介に、思わず声を出して笑った。

「…でもまあ…、なんだ。…………ちよつと元気出たみたいで、ほつとした」

笑みを浮かべる陽介に、話を聞きに来てくれてありがとう、とお礼を言った。

「ああ。…………絶対、事件解決させような…相棒」

そう言つて差し延べられた陽介の手を、強く握つて頷いた。

決意の夜が、更けていく。

END